

常識を疑え! 自分だけのアートを追求しよう

「私たちがここにいるのは、誰かがすでになしとげたことをなぞるためではありません」と京都大学の土佐先生は語る。土佐先生は、ニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館など世界の美術館で作品が展示され、2015年には京都国立博物館でプロジェクションマッピングを上映して約2万人の観客を動員した世界的なメディアアーティストだ。アートの最先端を知る土佐先生が、未来を生きる高校生に「新しい芸術」を案内する。

「メディアアート」は アートと科学技術の融合

「メディアアート」を創造する「メディアアーティスト」には、欠かせない四つのポイントがあります。まず一つは、アートと科学技術を自分の武器にすること。工学や化学、生物学など、何か別の分野をアートと融合させるのがメディアアートです。そこに新しい可能性があり、これまでになかった価値観が生まれるはず。二つ目は、自分が興味を持ったもの、大好きなものを大切にすること。他人から見てどんなに無価値に思えるものでも、それがオリジナリティを作り、あなただけの作品のテーマになっていくためです。私自身は、高校時代にダリやエルンストらシュールレアリズム(超現実主義)の影響を受けたことが、今の表現のベースになっています。

三つ目は、「失敗は成功のもと」を信条にすること。10代、20代の頃の失敗は、まだまだ笑って許されます。たくさん失敗して経験を積むことで自分の殻を破ることができ、その結果アーティストとして大事なインパクトを人々に与えることができるようになるのです。

そして四つ目は、常識を疑う姿勢。大学の研究も同じですが、常識を疑うことが新しい発見へとつながります。ぜひ頭

を柔らかくして、冒険心を持っていろいろな物事に取り組んでみてください。**まるでCG! 音の振動が生み出す美しい映像**

私は大学院の博士課程に進む際、音認識や画像認識などの先端技術を使ったアートをやりたいがゆえにコンピュータサイエンスを専攻しました。歴史を振り返ると、かつての偉大なアーティストたちは、その時々最新の技術を使って作



土佐先生の代表的な作品「Sound of Ikebana」。ハイスピードカメラによる撮影で、飛び散る液体の美しさを見事にとらえている。

土佐 尚子 先生

京都大学 情報環境機構 教授、芸術家

京都大学情報環境機構教授、シンガポール国立大学客員教授、工学博士(東京大学)、武蔵野美術大学映像学科講師、ATR 知能映像通信研究所、マサチューセッツ工科大学建築学部 Center for Advanced Visual Studies フェローアーティストを経て現在に至る。国際的に知られた日本のメディアアーティストの先駆者。2015年には京都府琳派400年記念最大の事業として、プロジェクションマッピングを京都国立博物館で行い、大きな注目を集めた。



使って、私は音の振動によってまるで生け花のような形を生み出す「Sound of Ikebana(サウンドオブイケバナ)」という作品を制作しました。重低音が出るスピーカーの上に布を敷いて絵の具などの液体を乗せ、音の振動で飛び散った液体をハイスピードカメラで撮影するので、何百回とくり返しカメラを回すことで、様々な美しい造形を捉えることができました。

江戸時代の芸術が、 最新鋭の技術で現在に蘇った!

さて、2015年は江戸時代の絵師・俵屋宗達による流派「江戸琳派」が始まってから400年という節目の年でした。華麗かつ大胆な琳派の画風はいわゆる装飾芸術であり、日本のデザインの始まりといわれています。これまでに時代を超えて多くの芸術家が俵屋宗達に私淑(し

しゆく)個人的に慕うことしており、私もその一人です。

江戸琳派400年を記念して行なわれた京都国立博物館の映像イベントで、私はプロジェクションマッピングを披露しました。プロジェクションマッピングとは、プロジェクターを使って映像を空間や物体に投影する表現技術です。博物館の大きな外壁に先ほどの「Sound of Ikebana」の映像を投影し、好評を博しました。

このプロジェクションマッピングのイベント時に、「うつろひ」という作品も上映しました。これはマイナス20度の液体窒素で凍らせた花が砕け散る瞬間をハイスピードカメラで捉えた作品で、まさにアートと科学技術の融合です。「うつろひ」は、その名の通り、うつろいゆく時間の流れや、日本人が大切にしてきたわびさびの心をコンセプトにしています。

アートには、時代を見通す力がある

アーティストとは、世界に向けて広く「自分が何者であるか」というアイデンティティや自分の国の精神性までも示すことができる素晴らしい存在です。このグローバル社会において、世界を意識した作品作りはとても重要です。

芸術から生み出されるものは、本当にたくさんあります。そして芸術には、時代の先端を見通す力があります。SF小説や映画などを通じて創造力豊かに描かれた近未来の技術が、その後で実際に技術者たちによって人工知能やロボットなどの形で具現化された例は枚挙にいとまがありません。

国境や言語、時代をも超えて、多くの人に影響を与えるアートは本当に素晴らしいものだと思えます。皆さんもぜひ、自分の殻を破り、オリジナリティあふれる自分だけのアートを追求してみてください。

2015年講義

土佐先生に質問

研究のやりがいはいかにあるのでしょうか?

一つの成功体験の裏にたとえ100以上の失敗があったとしても、自分が関心をもった未知のことを解決できた達成感は、ものすごいです! 世界中の人々へインパクトを与えるような研究を生み出すべく、日々取り組んでいます。

高校生へのメッセージをお願いします!

高校生の時にしかできないことがたくさんあります。しっかり学び、しっかり遊んでください。そして、友情も大切にしてください。時間を忘れて熱中できる学問を見つけたら、とことん突き進んでください。それは、将来自分自身を助けて、もしかしたら生きがいになるかもしれません。

土佐尚子先生のおススメ書籍



『TOSA RIMPA: 土佐尚子作品集』(淡文社) 土佐先生の専門である芸術とテクノロジーの世界への入門は、まず作品を見ることだ。そして、何なんだ、これは! という驚きの衝撃と好奇心と共に、自分もいつしか研究と制作の探求に突き進んでいる。そういう体験ができる本である。

KEYWORDS説明

- ① **メディアアート**
1970年代後半から始まった、テレビやビデオ、コンピュータ技術などの先進的なテクノロジーと芸術を融合させた新しい芸術表現のこと。
- ② **江戸琳派**
江戸時代初期(17世紀)の俵屋宗達を祖として、江戸中期の尾光琳によって大成され、江戸後期に酒井抱一に受け継がれた画風の一派。華やかで鮮やかな色合いが特徴。